

春燈



August 2009

8

主宰の句

安立公彦

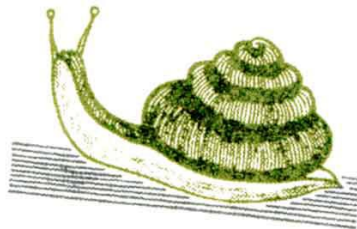
老鶯となりて身細る山路かな

薫風や最上舟唄波を分け

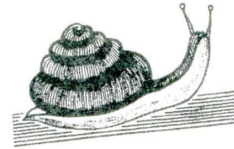
風吹けば風の紋章夏の河

夏雲や岩山削る発破音

電波時計一途に時の日を刻む



燈下集



○ 成田なな女

薔薇咲けば母の忌夫の忌も近し
麦秋や丈山苑のぼつたんこ
裏庭や勿忘草の花ざかり
白々と茅花流しの風やはし
春愁やまなざし深き阿修羅仏

○ 栗原完爾

櫓のはじく水のひかりの暮春かな
七騎落の海市を見たりわれ見たり
しんがりに値のつきにけり屑金魚
昼すぎの市場の闇や穀雨来る
夏蝶やパレットに溶く水の色

○ 松本俊介

下総の雲の厚さや棕櫚の花
バス去つて卯月の遠嶺残りけり
野あやめや雲が雲呼ぶ通り雨
片陰に人訪ふ襟を正しけり
風道に文机を置く単衣かな

○ 中野さき江

父母のみてこそその生家や祭笛
祭髪十九過ぎゆく日なりけり
御輿揉む喧嘩かぶりの豆しぼり
宵祭雨に高張りぬらしけり
抜路地を流れ遠音の祭笛

○ 堀内五齡

一夫五妻の矜持に歩せり羽抜鶏

書齋まで孫呼びに来る粽かな

もつこすのもつこす識らず朴の花

腕白の末の子愛ぐしかしは餅

兄ゆづりのぶかぶか帽子夏の雲

○ 小菅礼子

玉子かけご飯ひさびさ夏兆す

太郎竹皮を脱ぎ脱ぎ伸びゆけり

疎遠てふどれほどの間や麦の秋

回向柱に触るるひとひと新樹光(善光寺御開帳)

光雲・雲海作の仁王や雲の峰

○ 生田高子

紅著き大提灯や走り梅雨

志高きに置きてソーダ水

夏芝居生世話に肝を冷しけり

樟若葉みてぐらに翳おとしけり

藪の花や手兒奈の池の小濁り

○ 森下賢一

遠回しにアリバイ聞かれ茗荷汁

骨盤の形をしたるダリア植う

山法師旅に出ずして旅ごころ

猫のみはかびるひまなし黴の家

浜木綿に港の猫はいつも待つ

○ 櫻井白扇

すかんぼや還ることなき特攻機(霞ヶ浦)

さくらんぼ凶星の指をさされけり

薰風や嘶く相馬の「繋ぎ馬」

将門に影武者七人新茶汲む

クレーの小鳥逆さに止まる晩夏かな

○ 野崎昭子

梶子の闇押しわけて咲きにけり

でで虫やかなしきまでに首もたげ

尺取のしばらく虚空まさぐりぬ

まひまひの鼻つき合せ舞ひぬたり

群れ咲いて著我の明るき峠道

○ 本多遊方

方丈や敢へて新茶と言はずとも

いつ消えし餓鬼大将や柿の花

鴨足草沓脱ぎ石を右に見て

桑の実の熟るる大利根河川敷

青葉木菟夜の記憶を支配せり

○ 岡野イネ子

花粉症先づは猫より直りけり

桜桃忌薄白き花をつけ

瞑りて遠雷をきく夕まぐれ

心太酔のきき過ぎし別れかな

公園の四阿抜けし濡れ燕

○ さのれいこ

法師らに修羅場のありしお山夏

ちやうちん屋「紀の勘」京は地蔵盆

油断大敵海月に唇を奪はれし

朝顔にけふのいのちをもらひけり

いちにちはつくづく長し菱の花

○ 武田巨子

春日傘さしてわが城つくりけり

風車風ごと売つてくれにけり

奥伊勢のふところ深き暮春かな

墨の香に籠り卯の花腐しかな

ただ歩くだけで楽しや鴉の子

○ 諸岡孝子

父の日の楷書のごとき夫とをり

青岬砂引草の白こぼす

舷灯の昼をともして梅雨入かな

夏蝶の身を傾けて風岬

夏旺ん噴潮背伸びしてゐたり

○ 小泉三枝

青空を泡立てあふち咲きにけり

蜻蛉生る水辺きらめくものふやし

生き物のあかしの気泡沼五月

銭洗ふ箆の乾びし薄暑かな

上州の荒ぶる風に虞美人草

○ 宮崎裕子
葉桜のなだるる影や神田川

阿修羅像の背、美しき清らかな

綱張りて結界とせし顔佳草

父の忌や筆圧強き落し文

減量の犬ほめてやる夏木立

○ 平野加代子

ケルトの水脈めぐる旅路や若葉風

塩釜は古代氷河へ続きけり

みづうみの底ひの遺跡浮いて来い

虹に弦あるやに女神奏でけり

黒マリアの小さき御堂や百合香る

○ 田嶋洋子

未だ解けぬ数字パズルの日永かな

星殖やす八十八夜の森の冷

祖父ゆづりの広き額や初端午

話せば分かるはずの卯の花腐しかな

子の友の青き瞳や風薫る

○ 菅澤陽子
文机の文房四宝明易し

新緑の山を越えきし時の鐘

一杓の甘茶におん身輝やけり

芝青むパターゴルフに歩をふやし

皇后様に手を振る幸や春うらら

○ 高嶋文清

手話の児の指の先より燕来る

夕風や鋸ひく一人の息づかひ

久女の墓に飯の供花とす姫女苑

仏壇の蓬餅下げ小昼とす

人びとに五月雨濯ぐ御開帳

○ 石橋公代

雨に打たれし牡丹の緋の雫

聖五月いのち静かに池の鯉

寡黙なる恋人達に湖五月

古書店に探す句集や桜桃忌

噴水やショパンの曲のいまフォルテ

当月集

安立 公彦選



○ 松山 三千江

茉莉花や白衣の女医の脚線美

さくらんぼ小児病棟読書会

白服や海の男の挙手の礼

ひとり来て夕焼の富士と相模湾

夕星やじやがいもの花唄ひだす

○ 永井 恵子

火の山をなんなく越ゆる夏燕

軒低き蟹の家並さつき空

をみなにも立志ありけり花菖蒲

仁丹は男の香り夏に入る

番号で呼ばれる古墳竹の秋

○ 永島 雅子

苔庭の影やはらかき若楓

独り身の子へ持たせやる柏餅

雲切れて日輪宿す植田かな

天守台へ実梅の坂を昇りゆく

はるかなる天平へ日傘つづきけり(阿修羅展)

○ 小島 昭夫

手折る時卯の花のよく零るるよ

ソプラノの夏鶯よアンコール

楊貴妃もかくやと開く紫睡蓮

朝まだき先づ梔子の咲くを知る

起きぬけの一杯の水つりしのぶ

○ 西岡 啓子

薫風や翡翠を待つカメラマン

夏めくや夜を薫りて何の花

傘雨忌や雨にさゆらぐ花卯木

ふるさとへ列車近づく新樹かな

ひたすらに父のやさしさ柏餅

春燈の句

安立 公彦選

帰農三年畝まつづくに瓜の花

東京 高村 和子

甘酒を持薬と成して夫病める

老鶯のまだ鳴きぬたる背戸の藪

ふる里の余花の峠を越えにけり

セ氏二十五度北上山系万緑中

冷さうめん岩手の空の広かりき

風薫る一日を無爲に過ししか

夏帯を叩いて見すや婉然と

月下美人閉つや息の根絶えるごと

波の喝采浴びてあご飛ぶ潮の目

騒雨いくたび十薬を打つ太宰の忌

川音の夜は勁悍に太宰の忌

目薬に若葉映して注しにけり

京都 片山 博介

菖蒲湯や少年の日の喧嘩傷

卯波荒れ倭寇の島の見え隠れ

沖を見る妻のおくれ毛花あふち

花行脚こころに塔を築きつつ

月山の水の流るる紅の花

禿頭にお数珠頂く涼しさよ

ほうたるや草に蛇の目鼠の目

朝風や肥満の毛虫枝を落つ

鮎つまむ小僧の神もとほくなり

アスパラの青き茹で汁夏めきぬ

振れ花ねぢれしままを愛しめり

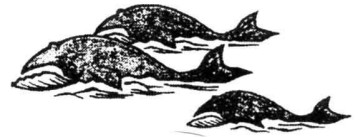
葉桜や五重塔の錆朱色

天蓋の新樹誘ふ奥の院

東京 篠原 幸子

東京 前田 鋭子

千葉 長戸 路子



余言

安立公彦

聖蹟の丘に風立つ五月かな

宮崎 安汀

六月十六日、宮崎安汀さんが死去された。通夜の席に座しながら、これで久保田先生時代の「春燈」を知る先輩が、また一人旅立たれたという寥々の思いを深くした。

安汀さんにとっては、八月号の五句が自選最後の作品となった。九十一歳という高齢にもかかわらず、句はいつも若々しく、しなやかだった。また、指導されていた日野春燈句会も、実りあるものに育て上げられた。

永年にわたる「春燈」への啓蒙を感謝しつつ、謹んでご冥福をお祈り致します。

傘雨忌や灯も明け方の獺の宿

富山 俊雄

「俳句四季」六月号の特集連載「私の歳時記」に、「春燈」

は「万太郎忌」の季語を割り当てられ、何人かの方に協力を頂いた。その中で作者は、へ傘雨忌や伊勢も桑名の獺の宿 俊雄の句を出句した。『流寓抄』所載で、昭和三十年作へ獺に燈をぬすまれて明易き 万太郎をゆかりとする句である。万太郎の句はさらに、泉鏡花の『歌行燈』に詩心を発する句。

俊雄さんはこの「傘雨忌」の句を、今回「伊勢も桑名の」から、「灯も明け方の」とした。この推敲はみごとに成功した。地名を削り、有明の灯火を配することにより、一句の求心力はさらに深まる。

私はこの句を見ながら、へ世にふるもさらに時雨の宿りかな宗祇へ世にふるはさらに宗祇の宿りかな 芭蕉の句を思い出していた。

白服や海の男の挙手の礼

松山三千江

この句を見ると、旧海軍兵学校の生徒を思い出す。今は海上自衛隊幹部自衛官か。

「挙手の礼」を辞書に当たると「挙手注目の礼」とある。この言葉から「注目」が消え、「挙手の礼」として定着するのはいつの頃からだろうか。このことは句作の眼目である「無駄な言葉の削除」に何やら似ている。「注目」は、「挙手の礼」に意味として含まれている。私たちは俳句を作る時、これに似た誤りをおかしてはいないか。

しかしこの句の印象は清々しい。「白服」はまさに「海の男の挙手の礼」に通う。ただその清々しい印象に付加する思いはない。

をみなにも立志ありけり花菖蒲

永井 恵子

上五中七に見るすつくと前を向く姿勢は、現代女性の社会進出を描写する。しかしただに男に並ぶということではない。「花菖蒲」がそのことを示唆する。

姿、香り、自立の全てを備えた花菖蒲の美しさは、「をみなにも立志ありけり」の本意をよく支えている。作者は九州宮崎の人。

遠望の天守したがへ鯉幟

坂本 悠亘

写生のよく効いた句だ。天守閣は城の本丸にある望楼であり、領主の権威の象徴である。鯉幟（を立てる家）は当然その天守の城に属する。それを鯉幟が天守をしたがえているとするとところがこの句の眼目である。

遠景に小さく望まれる天守と反対に、大写しされた鯉幟のひるがえる姿が見えるような句だ。

太宰忌やラム酒の匂ふ菓子箱

宮崎 紗伎

今年は大宰治生誕百年に当たる。文芸誌や新聞の文芸欄

には、このことにちなむ特集を掲げているものが多い。「新潮」七月号は、「わたしの人間失格」と題して、五人の作家の創作を載せている。見たく思い購ってはみたものの、目を通ず暇がない。

六月十九日は桜桃忌。この日はまた太宰の誕生日でもある。以前三鷹の禅林寺に立ち寄ったことがあった。森林太郎墓と刻まれた鷗外の墓の斜め前に、太宰治の墓があった。晩秋の頃だったがその墓には花が供えられ、そして墓石に文庫本の『津軽』が置かれてあったのを今でも思い出す。

太宰治の人氣は、残後六十一年経た今も衰えることはない。比較的年齢の若いファンの居ることが、何よりも太宰の人氣を支えている原因と言える。

この句、「ラム酒」と「菓子の箱」の取合せに、太宰治の笑顔の写真を見る思いがして、気持がほぐれる。

すれ違ふ香水の香やむかし呼ぶ 棗 怜子

こういう句には、女性特有の生活情緒が感じられる。夏の夕ぐれ、同性とすれ違った作者は、その女性のまとう香水の香に、かつて自分が好んで使った香水の香りを思い出した。今身近に香る香水、時間を巻き戻した時点で使っていた香水。それを結びつける生活と時間の高。

しかしこの句はいわゆる「軽み」の句として鑑賞したい。もとより「軽み」が軽さでないことは当然のことだ。